

9. 無薬飼養鶏で発生した鶏コクシジウム病清浄化の取組み

宇佐家畜保健衛生所

○南部雪江・加藤洋平・足立高士

【はじめに】

昨今の食に対する安心・安全を求める消費者ニーズから、肉用鶏飼養全期間で抗生物質や抗菌製剤等を一切使用しない無薬飼養鶏(以下、無薬鶏)生産農場は少なくない。一方、鶏コクシジウム病は、*Eimeria* 属原虫の感染によって起こる下痢や貧血を主張とする疾病であり、罹患鶏は斃死しないまでも増体率は著しく抑制され、経済的損失は大きい疾病である。今回、無薬鶏生産農場において *E.tenella*、*E.acervulina* 感染が発生し、無投薬による清浄化に取り組み、一応の改善が見られたのでその概要を報告する。

【発生概要】

当該農場は無薬鶏生産農場で、鶏舎数 2 棟、平飼いで総飼養羽数約 7,000 羽、90 ~ 100 日齢で出荷。初発は 2015 年 2 月 24 日(15 日齢)、次発は 2015 年 5 月 15 日(72 日齢)で主訴は共通して死亡羽数増加、食欲不振、発育不良、鶏冠・脚の退色であった。死廃率の増加により出荷率は発生前の 1 月 89.0%、2 月 88.9%が 3 月 76.6%、4 月 71.4%、5 月 75.5%、6 月 19.5%、7 月 45.1%、8 月 60.8%であった。

【検査結果】

初発事例では死亡鶏 3 羽の解剖検査、寄生虫検査、病理組織学的検査を実施。剖検所見では、3 羽に共通して盲腸に出血像を確認。盲腸内容からコクシジウムのオーシストは未検出であったが、病理組織学的検査で 3 羽に共通して十二指腸・盲腸のコクシジウム寄生が観察されたため鶏コクシジウム病を疑うと診断した。次発事例では、死亡鶏 2 羽を初発事例と同様の検査を実施。剖検所見で盲腸の非薄化が観察され、盲腸便より大小異なるコクシジウムのオーシストを検出した。病理像では、十二指腸から盲腸にかけてコクシジウムの寄生が認められ、臨床症状と併せ鶏コクシジウム病と診断した。*Eimeria* 属の種の同定のため PCR による遺伝子検査を実施し、*E.tenella*、*E.acervulina* が確認された。

【指導内容】

本農場は無薬鶏生産農場であり、薬剤の使用が出来ないため、対応方法として、消毒方法の改善は空房の徹底した水洗と石灰乳塗布を実施。また、すべての消毒に次亜塩素酸ソーダを使用していたものを、踏込消毒槽に消石灰に、器具機材の消毒には逆性石鹼を用いるよう指導。ワクチンプログラムの対応策として、最優先にコクシジウムワクチンの中止。その他ワクチンについては各種検査結果により変更するなど飼養管理の改善指導を中心に行った。併せて養鶏では古くから使われる唐辛子の給与を試験的に実施した。

【まとめ】

本農場は鶏コクシジウム弱毒 3 価生ワクチンを使用していたが、症例としてコクシジウム病が確認され、PCR 検査でワクチンと同種株が検出されたことから、何らかの原因でオーシストが環境中に広がったと考えられた。鶏舎消毒の変更など飼養管理を中心にした指導後は出荷率と出荷体重(中抜きと体重)はほぼ回復した。無薬鶏では疾病の侵入による被害は甚大なものとなることから、飼養管理が最も重要である。今後は本農場での再発防止を図るとともに、他の無薬鶏生産農場への指導を継続する。